

2013年3月29日 発行

森三郎刈谷市民の会

「森三郎の作品を読む会」

どなたでもいつの会でも参加できます

2月の「森三郎の作品を読む会」では、

「みかん」(「赤い鳥」昭和7年1月号初出)

「虎」(「赤い鳥」昭和7年2月号初出)

「森三郎童話選集 かささぎ物語」所収
を読みました。

「みかん」は、八世紀前半、万葉集の女流歌人大伴坂上郎女と一人娘の話という設定です。娘が光明皇后からいただいた「唐土のキツ」というめずらしいくだもの、和名が「コウジ」に決まったといういわれの話です。

この話は作者自身が「附記」で、創作の素材とこの話が作者の空想でこしらえた話だと説明しています。

「これは私が『大鏡』の聖武天皇のところの『神亀三年と申しにはじめて唐土（まろこし）より柑子をもて来れり」といふのから思ひつき」と紹介しています。森三郎さんは「大鏡」で読んだといっています(筆者注:「水鏡」の勘違いか?)。「続日本紀」では「神亀二年」の項にこの話は出ています。そして、作者は続いて、大伴坂上郎女や夫の宿奈麿の歌などを紹介しています。

今回読んだ「みかん」のこの附記は、1月に読んだ「三条中納言」の話材が「万葉集」の歌であるということの傍証になっています。しかも、それが大伴家持の歌なのですから、大変興味深いです。(「森三郎の作品を読む会」通信8号参照)「みかん」の登場人物、大伴坂上郎女は大伴家持の叔母で母亡き後養育してくれた人、さらにその娘は後に家持の妻になるのですから。森三郎さんは二つの作品を続けて書きながら、ひとりにこにこととしていたことでしょう。森三郎さんがこの当時どんな読書をしていたかということがわかる資料にもなっています。

「虎」は中国の話です。

「森三郎の作品を読む会」では、「赤い鳥」掲載の形で作品を輪読しています。この話を読み終わった後、しばらくみんな黙ったままでした。虎に襲われるかもしれない危機の中で、虎と心を通わせることができるようになったこと、虎にお礼をしようとする主人公と、虎の出現に恐怖を抱く人々も結局虎をとらえることなく、帰ってやったことなど、心洗われる筋立ての余韻に浸っていました。

中島敦が「人虎伝」を題材にして、昭和17年(一九四二年)に発表した「山月記」とはまた一味違う「虎」にまつわる話でした。

「森三郎童話選集 かささぎ物語」に収められているので、多くの人に是非読んでほしいと思いました。

また、「ウエン王子とトラ」(チェン・ジャンホン作・絵、徳間書店、二〇〇七年六月初版)という絵本のことを想ったという会員もいました。これは赤ちゃんの時に虎に育てられたという伝説に基づいた話です。絵本には、パリのセルニスキ美術館所蔵の「雌トラ」という青銅器の絵も出ています。人間が虎に抱かれて安心しきっている表情が印象的です。

次回予定 平成25年4月12日(金)午後1時〜3時

「役行者物語」(「赤い鳥」昭和7年3・4月号初出)

「森三郎に親しむ集い」のご案内

日時 成25年 5月12日(日)午後1時10分〜3時40分
会場 刈谷市社会教育センター ホール

(谷市民交流センター4階)

童謡斉唱・ヘルマンハーブ演奏・森三郎童話朗読劇